

日中若手研究者フォーラム（中国・北京師範大学）に関する報告（参加レポート集）

2010年5月26日 関西学院大学大学院社会学研究科 大学院 GP 事務室

■ 1. 目的とスケジュール ■

以下のスケジュールで、西宮・京都・奈良において学術交流フォーラムおよび共同調査を実施した。

○ 目的：

北京師範大学（以下 BNU）民俗学国家重点学科と関西学院大学大学院社会学研究科（以下 KG）大学院 GP プログラムによる学生交流および共同調査の実施が、本フォーラムの主たる目的である。

今回は過去 2 回のフォーラムの総括として位置づけられるもので、BNU より 4 名の院生、2 名の教員を向かえ、はじめて日本において開催された。これまでのフォーラムとの大きな違いは、共同調査メインにすえられている点である。BNU および KG の院生・研究員が共に西宮を中心とした阪神地域における変化を「再生」「再開発」という観点から調査した。また本調査を通じて、調査で得られたデータをもとに、地域の変化というテーマにたいして、社会学、民俗学双方からどのようなアプローチ（分析）が可能か、専門分野が異なる研究者による共同調査の可能性を検討した。

○ 人員：調査報告会での報告者（KG メンバー）

松村淳、傲登、稲津秀樹、崔海仙、林梅、荒木康代（研究員・院生）、中川千草（GP 事務室）

○ スケジュール：

＝4月1日(木)＝

- ・ CA927 便にて BNU メンバーが来日（宿泊：関西学院大学内、スポーツセンター）。

＝4月2日(金)＝

- ・ 午前：学内案内
- ・ 午後：調査準備会（古川教授による景観調査に関するレクチャーおよび班別の調査準備）

＝4月3日(土)、4日(日)＝

- ・ 西宮市における調査

＝4月5日(月)＝

- ・ 午前：調査報告の準備
- ・ 午後：調査報告会

＝4月6日(火)、7日(水)

- ・ 京都および奈良における比較調査

＝4月8日(木)＝

- ・ CA928 便にて、BNU メンバーは関空から北京へ。

■ 2. 阪神地域における共同調査および調査報告会について ■

高度経済成長期からはじまった「まちづくり」の動きは、地方から都市へと広がり、その内容も多様化している。本調査の目的は、まちをつくるということの意味や意義、また、まちづくりのプロセスで「再発見」されてゆく歴史や文化を通して、阪神地域（西宮）の変化の特徴をあきらかにすることにある。西宮での調査後には、京都と奈良において比較調査を実施した。京都や奈良が持つ絶対的な歴史軸（ex. 遷都 1300 年）の存在、そして、その歴史軸が「〇〇づくり」という実践のなかで生かされる様子を確認し、西宮調査で得られたデータを再検討した。最終的には、西宮、京都、奈良での調査結果と 2009 年 8 月に実施した北京・798 芸術区における調査内容を照らし合わせ、それぞれの地域が抱える歴史性、再生／再開発という実践を社会学、民俗学それぞれの視点から再分析することを試みた。

「西宮中央商店街の調査報告」

- 松村 淳 (関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程前期課程)
傲登 (同研究科 博士課程後期課程)
荒木 康代 (同研究科 大学院研究員)
林 梅 (同研究科 大学院研究員、RA)
刘 昌翠 (北京師範大学 民俗学国家重点学科 硕士研究生)
吴 文仙 (同学科 硕士研究生)

「白鹿博物館から<見えるもの>/<見えなくなるもの>」

- 稲津 秀樹 (関西学院大学大学院社会学研究科 博士課程前期課程)
崔 海仙 (同研究科 大学院研究員)
山本 早苗 (同研究科 研究科研究員)
邵 凤丽 (北京師範大学 民俗学国家重点学科 博士研究生)
李 灵曦 (同学科 硕士研究生)



白鹿記念酒造博物館での調査



調査報告の準備

【松村 淳 (M1)】

北京師範大学との合同調査も 3 回目を迎えた。今回の合同調査で私は京都の景観保全についての調査のコーディネートを担当させていただくことになった。

観光都市として世界に広く知られる京都にはたくさんの観光資源がある。寺社仏閣を中心とするそれらは拝観料収入をはじめとする潤沢な資金と明確な保存システム(文化財指定などのバックアップ)により観光資源として盤石の保存体制を有するほか、京都の景観を形成する重要な要素として広く承認されている。しかし、古都京都の景観を形成する要素は寺社仏閣だけではない。都市に居住し、またそこで生産活動を行う住民たちが起居してきた町家と呼ばれる木造住宅もまた、“京都らしさ”を構成する重要な景観要素であるといえる。しかしながら、町家は個人の住宅である場合がほとんどなので、パブリックな保存の対象となりにくく、現在までに多くの町家が都市開発の裏で失われてきた。2004 年の景観法の設立が象徴するように、近年の景観意識の高まりの中で町家も再評価され、本格的に保存と活用に向けた動きが行政、民間双方で活発になってきている。

さて、町家とは何か。以下に簡単に概要を記しておく。平安時代中期頃より発展し、江戸時代の中ごろには現在残る形にほぼ近いものとなった。外観は、紅殻格子(べんがらこうし)と呼ばれる色の濃い格子、虫籠(むしこ)窓、犬矢来などが特徴的である。2 階建てが多いが、平屋や 3 階建てもある。”うなぎの寝床“という呼称が巷間流布しているが、その名に違わず間口が狭く奥が長い作りをしているのも特徴的である。また典型的な盆地の気候である京都の酷寒、酷暑を緩和するための様々な仕掛けを看取することができる。職住一体となった住居であるということも特筆すべきことであろう。

今回、京都の共同調査に与えられた時間は一日である。その限られた時間では十全な調査は不可能である。ゆえに今回は町家に関わる様々な主体のうち、三者に限定して話を伺うことにした。まずは実際に町家を利用して事業を始めようとする若者、次に町家の保全・改修を実際に手がけた建築家、そして最後に行政機関である。

調査としては予備調査的な内容であるが、それでも何とか町家の保存と再生の全体像が垣間見られるようなコーディネートを心がけた。

当日。まず、町家を改装してバックパッカー向けのゲストハウスを設立する予定である白石氏に話を聞くために西院を訪れた。

ゲストハウスを開業する予定の建物は白石氏の祖父母の住まいであり、祖父母が亡くなった後は空き家となっていた。その建物は伝統的な町家というものではなく、日本の住宅様式にもっとも多くみられる木造在来工法による築 50 年ほどを経た民家であった。保存の対象となるような町家ではないが、北京師範大学の留学生にとっては、午後に訪問する伝統的な町家との比較もでき、一般的な日本の民家を探訪しておくのもよい経験であったと思われた。現地では二時間ほど話を伺った。インタビューの内容は、白石氏がゲストハウスの経営に乗り出すまでの経緯、つまりライフヒストリーが中心となった。それだけ彼の生き方が参加者の興味を引いたのだろう。

昼食後、二つ目の目的地である“あじき路地”に向かう。“あじき路地”は狭い袋小路の両側に町家が並んだ地区である。朽ち果てていく町家を見かねた大家が、若者に住居と工房を兼ねた職住一体型の家屋としてそこを提供したのがはじまりである。現在では全国から客が訪れる名所として認知されるに至っている。“あじき路地”の改修に関わった建築家の村上愛樹氏に現地を案内いただいた。週末はパン屋として営業している一軒の町家にあげてもらい、そこでレクチャーを受けた。レクチャーの内容は多く分けて二つである。一つ目は法律の問題である。

法律に照らし合わせると、都市の中の木造住宅の現状は極めて厳しいものがある。大都市の中心部のほとんどは防火地域として指定されており、そこに建設される建築物は耐火性能が要求される。つまり木造建築物はその性能を満たすことができない場合が多いのである。

木造の町家を新築することは極めてまれであるが、既存の建物を保存・改修する場合にも大きな困難が横たわる。その一つは既存不適格という条項である。これはその建物が建てられた当時は適法であっても、現在の法律では違法とされる場合においては、既存の部分も現在の法律に適合するように改築しなければならないという条項である。これが適用されると、木造の町家はすべて既存不適格となり、もとの姿を残しておくことはできなくなるのである。しかし家主のみならず、町家を観光資源として活かしたい京都市なども、現行の法律に合致しないからといって町家が解体されていく現状を憂慮しているようである。そこで、後述する「京都市景観・まちづくりセンター」を設立し、本格的な町家の保存、再生に乗り出している。

二つ目の内容は、伝統的な建築工法の集大成としての町家の保存の難しさである。

町家は伝統的な工法が多く用いられている。たとえば、町家の壁は“木舞壁”と呼ばれる壁が用いられている。それは伝統的な土壁の一種であり、木舞で作った下地を芯にして、泥にわらを切り込んだ荒壁を厚く塗り、漆喰(しつくい)などで仕上げた壁のことであるが、現在この工法で壁を作ることができる職人が減ってきていると村上氏は話していた。一軒の町家に多くの専門的な職能を持つ集団が関わることで、それぞれの職能が継承されていき、伝統が保たれてきた。しかし近年、町家を技術的に支えてきた大工や左官などの専門家が姿を消しつつある。いわば“町家をめぐる生態系”が崩れてきていることも、町家保存を難しくしている要因である。

つづいて、行政側の話聞くために「京都市景観・まちづくりセンター」を訪れた。ここは京都市によって設立された財団法人であり、市民主体のまちづくりのネットワークの構築を主眼に置きながら、京都の景観の保全・想像といった役割を負っている。15分ほどの町家についてのDVDを鑑賞したあと、担当いただいた木下氏に町家の現状についてのレクチャーをしていただいた。時間の都合もありあまり活発な質疑応答はできなかったが、映像資料はとてもコンパクトに要点がまとめられており、北京師範大学の学生にも好評であった。今回の京都の調査は、2009年8月に調査した798芸術区における調査の延長線上に位置している。798芸術区はバウハウスの流れを汲むドイツの建築家が設計した工場群を破壊するのではなく、芸術区として保存・再生することに成功している事例であった。そこは、テーマパーク的に景観を保全するのではなく、実際に人が居住し、生産活動を行いそこが「生きられた空間」となっているのだ。

京都町家もまた、人が住まいそこで生産活動を行うことによって同様の「生きられた空間」となっている。そのような空間が連なっていくことで、京都や北京といった「古都」に積み上がってきた時間を継承した重みのある景観形成がなされていくのである。

【傲登 (D1)】

今回の調査は、一日半の調査を3時間でまとめて報告会を開き、円満に成功した。参加者の協力がとてもよかった。これは去年の二回の共同調査があったからこそできた。去年の二回の調査を終えて、今回の共同調査では師範大学はどの部分を担当するか、関学側はどの部分を担当するかは暗黙のうちに形成されていた。4月5日の報告会では二つのグループの報告はとても深みのある報告になった。特に、この三回の共同調査を行ったことによって、民俗学と社会学の共同調査を行う上で、互いに補

うような役割を分担しているように思う。社会学はマクロ的なもの注目して、民俗学はミクロなところに注目している点に関してとても印象深かった。今後自分で調査を行う場合は民俗学的な視点、手法を学ぶ必要があると改めて実感した。

今回の調査を始める前に、具体的に調査地域に関して、事前説明会を開いた。人形館の具体的な活動によって、西宮の商店街の復活、町おこしにどのように意味がもたされたのかについて、紹介した。もし、事前の紹介で、人形館の芝居の具体的な映像を入手していれば、人形館の役割がもっとわかりやすかったかもしれない。というのは、通訳をしている私自身も、その人形芝居館の説明を聞いても、あまり分らなかったからである。それによって、通訳の面で行き届かなかったところがあった。今回の調査では時間の都合では無理だったが、もし、今後もこのような共同調査を行うことがある場合は、文化的な違いによって、説明を聞いてもあまりピンとこない場合があるので、言葉で説明するよりは画像を見た方がわかりやすい。

今回の共同調査を行って、報告する作業を二つのグループに分けて報告した。白鹿酒造館に関する報告はとてもよかった。人形芝居館の調査報告(私の所属するグループ)を白鹿酒造館の報告と比較して不足しているところは、せっかく共同調査を行ったのに、報告会の準備作業そのものを分けてしまったことに起因する。人形芝居館の報告では、それぞれが準備したものを合わせてひとつの報告にした。関学側の調査者は調査の概況を作り、師範大側は人形芝居の具体的な演劇を紹介することになっていた。しかし、それぞれの準備したものを合わせてみると、重複していたところがあった。最初から共同作業をしていれば、一緒に相談することができ、限られた時間でももっと充実したものになっていたはずだろう。

今回の共同調査では私は主に通訳の仕事を担当した。通訳として報告会で大きなミスを起こしてしまったことに関してみんなに申し訳ないと思っている。北京師範大学側の院生の準備した報告を訳したときに頭の切り替えができなくて、北京師範大学の院生に対して迷惑をかけたと思っている。通訳の力がまだまだ足りないことに改めて実感した。共同とはみんなで同じことに取り組んで、同じゴールに向かうことである。しかし、その共同調査を行う上で調査者全員の関心領域が合うことはあまりない。特に、文化と社会的背景の違う者が共に作業をすることはより一層困難である。今回は中国人留学生として間に入っていることによって、文化や言語、学問的関心が違う院生同士の話をうまく、円滑に伝えることの難しさを体験したことがとても良い経験になった。二年間にわたる三回の共同調査は、私自身にとって良いトレーニングになり、今後ともいろんな活動に参加する自信をつける土台になったと思う。

【林梅(研究員)】

1. はじめに

昨年8月に開催された第2回日中若手研究者フォーラムの最終報告においては、調査内容の報告が大部分で「フィールドワークの理論と技法を構築」する内容に結びつけた議論まで到達できなかった。が、社会学や民俗学の調査手法を間近で経験し、両学問領域の共通点や差異を感じる事ができた。その差異の確認などをふまえ、第3回目の日中若手研究者フォーラムを迎えた。本報告はおもに、学術、運営といった二つの側面から述べたい。

2. 共同調査による学術の成果

4月3日から4日までの一日半の西宮調査では、西宮中央商店街と白鹿博物館の調査を行い、その

結果をまとめて報告にのぞんだ。二つのグループに分かれて行った報告では、それぞれ社会問題に対するアプローチや視点の違いが見えて社会学と民俗学の特徴をあらわしていた。

まず、「中央商店街の調査報告」である。関学メンバーの社会的アプローチは、商店街の衰退に対して復興に取り組む戎座人形芝居館の実践に注目し、「伝統文化」という資源を利用する戦略に注目した。それに対して、北京師範大学のメンバーは戎座人形芝居におけるコミュニケーションの心と心の交換という点に注目するような民俗的アプローチを行い商店街の変化を考察した。次に、「白鹿博物館の調査報告」では、関学メンバーは、近現代の酒造産業から見た博物館における可視化と不可視化に対して考察し、北京師範大学のメンバーは酒蔵館構造部分に着目して明らかに断絶された形で展示されている博物館の不可視化を指摘した。異なる学問分野(社会学と民俗学)、視点とアプローチの仕方(大きな社会問題とマイクロな問題点)、文化と言語(日本と中国)であったが、同じ調査対象と向き合い、議論を重ね結果が出された。これは、社会学と民俗学の歩み寄りの可能性の示唆につながる。

第2回目のフォーラムにおける報告で「共同フィールドワークの理論と技法」を話題にあげて議論することができなかったことに対して、今回は不十分とはいえ、調査者の先入観の問題、調査対象者の建前と本音、通訳をはさむことで起きる調査データの「翻訳」に関する問題などが提議された。時間的問題もあって議論を十分に深めることはできなかったが、今後に向けた課題として大変有意義なものであろう。

個人的には、国際調査における言語問題に注目している。国際発信能力として「英語でのコミュニケーション」を前提とすれば、今回のプログラムにおいては両機関の院生・研究員ともに困難が目立った。日本語と中国語に対応可能な通訳者がメンバーとして参加することにより、調査や発表会は大きな問題なく終了できだと思ふ。しかし、共同調査からみたときに、時間に追われる調査のなかでは、「翻訳」する際に簡略や省略を必要とすることがしばしば起きる。そういう場合、民俗学や社会学の知識があらかじめ共有されていなければ、誤解を生んだり、相互コミュニケーションがむずかしくなる。誤解を解くために逆に時間がかかってしまうということもある。また、質問者が複数いる場合、質問者の調査経験や学問領域が異なるがゆえに、質問内容が統一されず、質問する側、される側、さらに通訳する側の誰もが「場の流れ」がつかみ取りにくいという事態を引き起こすということがしばしばみられた。これは単に言語上の問題ではなく、「共同調査」という手法における課題にもつながることである。発表会における通訳は、さらに専門知識(民俗学と社会学)が必要となる。直訳よりむしろ発表者の主張がどのような目的、民俗学あるいは社会学の考察や分析に基づいておこなわれているかを念頭に置いて通訳に務める必要がある。

3. 運営上の経験

今回の両学校の共同調査と発表においては、学問や言語、そして所属機関など、さまざまなバランスをとることに注意しなければならなかった。ここでいう、バランスをとるということは、異なるもの同士の「境界線」を互いに明確に認識するということの意味する。一連のプログラムでは、「通訳」に依拠する部分が大きかった。通訳を担当する者は、学問的、文化的、言語的背景を把握したうえで、翻訳作業にとりかからなければならないが、限られた時間では限界がある。通訳者以外の参加者も同様である。さまざまな状況が異なるなかで行う共同研究は、何が違うのかという「境」を見極め、その部分を理解することによりはじめて共同調査の「土台」ができると思う。それぞれの方法と意図があり、互いに相手側の内情に深入りすることを避け、同時にその内情を理解しながら円満に交流する

には、まだまだ時間が必要である。誠心誠意のコミュニケーションをつとめるがゆえに、かえって、事態を複雑化するということが少なくない。むしろ、境界線上でお互いに共有すべきこと選定して行くということが、いかに共同調査を円滑化するかということが分かった。どこからどこまでを互いに「伝えるべき」内容を明確にしなければならない。

さらに、問題がおきることは当たり前なので、起きた場合にどのように対応するかが問われる。境界線を把握した「通訳者」が運営にかかわることにより、「クッション的解決法」が功を奏することもある。問題が起きたときは、通訳者の「説明不足」や「通訳上のミス」として処理することにより、一旦問題を収束させ、後々に時間をかけて問題を根本的に検討するということが何度もあった。

今回のフォーラムにはいろいろな困難やハプニングが連続していたが、だからこそ、今後の交流に向けて生かせる経験知が獲得できたのである。フィールドワークの理論と技法においても他の学問分野だけでなく、同じ学問分野の他のフィールドワーカーを間近で観察することで、多くの発見があった。同時に、国際ワークショップを企画・運営・通訳(翻訳)した経験は、これからの学内や学外における学術交流に大きな力となるだろう。

【山本早苗(研究員)】

これまで北京で2回開催したフォーラムと共同調査では、しばしばコミュニケーションの齟齬に直面しては歯がゆさをおぼえ、おたがいに日中の社会学・民俗学への理解が少ないためディスカッションが噛み合わなかった。そのほかにも運営や組織化のしかたの違いへの戸惑いや腹立ちを抑えるといった経験を積み重ねてきた。今回で3回目となる日中交流プログラムでは、KG・BNUメンバーがともに、これまでの反省を生かしながら、積み残してきた課題をひとつずつ解決してゆくプロセスを共有することができた。その成果は、西宮調査報告会と発表用のパワーポイントを作成するプロセスに体现されていたとあっていいだろう。

これまで前門、北京・798芸術区、西宮の3つのフィールドをメインにして、ディシプリンを異にする日中の院生・研究員による共同調査を実施するなかで、ようやく共同フィールドワーク論を展開するための基礎を築くことができたと感じる。この二年間の成果を東アジアにおける共同フィールドワーク論として展開することは今後の課題として残しておいて、以下、本報告では、筆者が担当した奈良調査を中心に今回の日中交流プログラムについて振り返りたい。

中国・唐の都「長安」や北魏洛陽城を模倣して建造された平城京の町割りは、いまなお奈良の景観にその姿をとどめる。奈良は、今年、平城遷都1300年祭というビッグイベントを迎え、文化遺産や歴史的景観そして伝統工芸を生かしたまちづくりを実践している。調査では、これまで奈良のまちづくりでは、1) 伝統的な文化や景観の保存・再生の取り組みがどのように行われてきて、どのような課題を抱えているのか、2) 現在、どのような担い手たちにより、どのような志向をもったまちづくりが展開されているのかを理解することをつうじて、震災を契機とした西宮のまちづくりの独自性や課題について理解を深め、京都の町家を生かしたまちづくりとの比較をおこなうことを目的とした。

午前中は、JR奈良駅から猿沢の池をめぐる奈良町まで歩いてゆくと、突然、鹿の行列に出迎えられる、神様の使いかしらと微笑ましかった。「ならまち格子の家」で奈良町の町家の構造を学び、当時の人びとの暮らしぶりの一端を実感することができた。また、奈良も京都も当時の租税対策のため間口が狭く奥に長い「鰻の寝床」の町家構造となっているが、奈良町の町家には、京町家とは異なる特徴がいくつかみられた。たとえば、鹿が格子に角をぶつけて怪我をしないように配慮して格子に面取り

がなされており、人びとの住まう場に奈良特有の人と動物とのかかわり方を見て取れたほか、京町家の格子は繊細に作られているのに対して、奈良の町家の格子は太くどっしりした造りになっていることが紹介された。

その後、奈良町の飴細工の老舗、蚊帳や灯りを現代アートとしてアレンジした手工芸店をめぐり、奈良町のシンボリック的存在である元興寺に詣でた。奈良町めぐりを終えてから、奈良町物語館にて、奈良まちづくりセンターの理事長である室雅博氏が、奈良町でのまちづくりの経緯や活動内容について紹介して下さった。1970年代に計画された都市道路開発への反対運動を契機として、住民(町衆)を主体にはじまった奈良町まちづくりの展開について学んだ。遷都による社寺のまちから商業のまちへ、さらに観光のまちへと変貌してきた奈良のまちづくりのユニークさや現在抱えている課題を理解することをつうじて、震災を大きな契機とした「生きられた時間」において展開している西宮のまちづくりとの共通点や差異を考えるきっかけになった。

午後からは、平城遷都1300年記念事業として開催されている「大遣唐使展」を見学することをつうじて、日中交流の歴史と唐代の文化が日本に受容されていく歴史を学び、西宮の生きられた時間をはるかに越える歴史的時間を基軸にした時間感覚でおこなわれている奈良のまちづくりを実感した。その後、海外からの観光客でにぎわう世界遺産の東大寺へ参詣し、一昨年に実施した前門調査での歴史的景観の復興と比較しながら散策した。

・BNUメンバーとの思い出(共同調査+α)

これまで2回の北京調査は滞在期間が長く自由時間があつたので、北京散策を楽しむことができたが、今回の西宮調査は、わずか一週間で共同調査と報告会をこなさなければならず、KGメンバーにとってもBNUメンバーにとっても、非常にハードなスケジュールだった。そんな中、個人的に印象深かったのは、関学側のスタッフとしてスポーツセンターに宿泊した3日間と最終日だ。

BNUメンバーは全員はじめての外国生活のため慣れないことも多く、しかも連日の共同調査と報告会の準備のため睡眠不足になって少し体調を崩す学生もみられた。それにもかかわらず、彼女たちは、報告会前日にパソコンが使えないなか、パワーポイントのアウトラインだけでも作っておこうと、夜中まで報告内容についてディスカッションをかさねて、共同調査の成果やそこでの気づきをKG側に伝えられるように真摯に検討し、帰国後、今回の成果をBNU側にも報告できるようにと工夫していた。報告会のグループ分けや報告会当日の午前中は、KG・BNUの混合班で2グループにわかれて報告のテーマやポイントを絞りこみながら、社会学と民俗学の良さを生かせるようパワーポイントを作成していったのだが、この対話のプロセスがなによりも大きな収穫だと感じた。

日中交流プログラムの目的である共同調査にとどまらず、みんなで一緒に食事したり、夜ふかししながらお喋りしたりと、ただ共同調査をするだけで終わらない、こうした交流の時間がとても楽しくて何物にも代えがたく、最終日の別れ際、名残り惜しくてたまらなかった。

最後になりましたが、日中交流プログラムに多大な時間と労力を割いてくださった先生方、GP事務室の中川さん、RAの林さん、本当にありがとうございました。これまで3回の日中交流プログラムをつうじて、大変お世話になりました。

【荒木康代 (研究員)】

本稿では、4月3日におこなった西宮中央商店街および同商店街にある人形芝居館についての日中共同調査の概要を報告する。同日は西宮神社周辺および商店街地区を観察調査した後、戎座人形芝居館において戎舞 (人形芝居) を見せていただき、西宮中央商店街振興組合理事長、戎座人形芝居館の館長、副館長の3名からお話を伺った。本調査では、商店街がどのように人形芝居という伝統文化を利用して商店街の復興再生につなげようとしたのか、ということについて、特に人形芝居館の設立とその活動に焦点をあてた。

西宮中央商店街は、江戸時代から西宮神社の門前町としてさかえ、1960~70年代は買物客の肩がふれあうほどにぎわい、最盛期には2つの市場を含む約220件が軒を連ねていた。しかし、1970年ごろから周辺に大規模商業施設が建設されるなどして、徐々に買い物客が減少、さらに、1995年の阪神大震災によって商店の8割が全半壊し、商店は震災前の3分の1の60店弱にまで減少した。また、2003年に大規模商業施設であるエビスタ西宮が駅前にできるなどして、商店街への買い物はさらに減った。



【画像1 1955年の商店街】



【画像2 2010年の商店街】

震災後の復興は商店の激減によってなかなか進まなかったものの、兵庫県の震災復興基金や西宮市の地域連携商店街活性化支援重点モデル事業助成金などを利用することによって、2007年から商店街は本格的に復興・活性化に取り組みはじめた。活動としてまず取り組んだのは、「西宮神社の門前まち『戎参道』づくりとそのPR」である。そのための「風情づくり」としてアーケードの撤去、石畳舗装、街路提灯などの整備をし、戎の顔を描いた大型暖簾を製作、店前に設置した。このようなハード面の整備に対して、ソフト面では、各商店の「良品」を紹介する「良品ガイドマップ」を作成した。これは、大型商業施設に対抗するためには、①良い商品、②細やかなサービス、③人と人とのコミュニケーションを重視することが必要だという考えによるものであった。また、「戎参道商店街」を愛称にするとともに、商店間の連携を活発化して、商店街ガイドや商店街ニュースなどを発行するようになった。

このような取り組みは商店街として一般的なものであるが、特徴的なのは人形芝居という西宮の地

域資源の利用である。西宮は人形浄瑠璃のルーツである人形芝居発生の地とされており、人形芝居の傀儡師たちは、すでに平安時代末期から存在した。彼ら彼女らは西宮神社の北の産所町に居住し、小さな人形の入った箱を首から提げて人形操りをしながら各地をまわり、戎信仰を広げていったとされている。この傀儡師による人形芝居を「えびすかき」といったが、西宮ではその後衰退し人形芝居は淡路浄瑠璃へと受け継がれた。西宮商店街では、この「えびすかき」をモデルに「西宮独自の人形操り」を復活させようと、2005年から兵庫県の助成を受けて「くぐつ再興プロジェクト」を始め、人形芝居えびす座も結成した。2007年6月には商店街の元呉服店で空き家となっていた店舗を改装して常設の人形芝居館を建設した。すなわち、当商店街では、商店街のハード面の整備よりも地域の伝統である人形操りの再興の方が先んじていたということになる。

現在、人形芝居館は各地の人形芝居サークルの練習・発表の場ともなっており、月1回人形芝居定期公演を行っている。またそれ以外にも、落語や紙芝居、マジック、こま回しのイベントなど活発な活動を行なっている。その背景には、人形芝居館を地域住民のコミュニケーションの場と位置づけるとともに、「笑ってもらうしかけ」を作っていくことによって、購買意欲に結び付けたいという意図がある。このような活動は商店街内の活動にとどまっていない。2009年6月からは、淡路人形浄瑠璃と提携しての人形浄瑠璃ワークショップも行い、本年3月にその成果発表として、人形芝居館前広場で伝統的な人形操り「えびすかき」を元に創作した「戎舞」(写真)を披露した。また、南淡路と提携して鮮魚市や野菜の青空市を開催するなど、西宮と淡路島の文化交流と産業交流をリンクさせた地域交流を図っている。このように、人形芝居および人形芝居館の活動は、当商店街活動において非常に大きな位置を占めている。

商店街活性化の資源として地域の伝統文化が利用される場合、それを商店街のシンボルにしたり、あるいはデザイン化して、それを描いた商品を開発することが多い。たとえば、当商店街の例でいえば、戎の顔をかたどった暖簾の作成や戎せんべいの開発などである。

しかし、当商店街における人形芝居の位置づけは、すでに見たように人形芝居館の建設・積極的な活動など、単なる商店街の活性化にとどまるものではなかった。むしろ、人形芝居の再生・復興・発展の方が中心であり、その波及効果として商店街の発展が期待されているような印象を持った。このような長期的な商店街活性化策には、商店街店主たちの理解が欠かせないが、今回の調査では、各店主への詳細な聞き取りまですることはできなかった。また、人形芝居館は、コミュニティ再生の場としても位置づけられているが、それが今後どのように発展していくのかなど、機会があればぜひ調べてみたいと考える。



【画像3 戎舞】

本報告では、人形芝居そのものについて詳しく述べることができなかったが、この点については、

報告会において BNU 院生が人形芝居「戎舞」において演者が観客の笑いをとりながらコミュニケーションを図っていく様子を詳細に観察して「こころの交流」という観点から報告を行ってくれた。

前回、前々回の北京における共同調査に引き続き、今回は日本に場所を変えて共同調査を行った。3回目ということでお互いの研究分野への理解も深まっていたことから、報告の分担についても時間をかけずにあうんの呼吸で調整することができたように思う。また、関学側と BUN 側の異なる視点からの調査によって、調査対象に対する理解もより深まったと感じた。ただ、時間的な日程が十分取れなかったため調査とその後の話し合いに十分時間が取れなかったのは残念であった。



【画像 4 人形芝居館にて】

最後に、お話を聞かせていただいた西宮中央商店街振興組合理事長岡山勝義氏、人形芝居館館長頼田稔氏、同副館長（商店街副理事長）で人形芝居「戎舞」を演じてくださった武地秀美氏、同じく演者で商店街理事の松田恵司氏、また当日の調査に先立って西宮の町づくりについて教えていただき、パンフ・資料も提供していただいた西宮市都市局都市計画部景観まちづくりグループ課長補佐岩井一郎氏、同岩田郁子氏に対して心からお礼を申し上げたい。

* 本報告の内容は、戎座人形芝居館、西宮中央商店街のパンフやニュースおよび聞き取りによる。

以上。